

2 令和6年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について

1 調査の目的

- (1) 国が全国的な子どもの体力の状況を把握・分析することにより、子どもの体力の向上に係る施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会が自らの子どもの体力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、子どもの体力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各学校が各児童生徒の体力や運動習慣、生活習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

2 調査対象とする児童生徒

- (1) 小学校調査
小学校、義務教育学校前期課程及び特別支援学校小学部の5年生全員
- (2) 中学校調査
中学校、義務教育学校後期課程、中等教育学校及び特別支援学校中学部の2年生全員
※特別支援学校及び小中学校の特別支援学級に在籍している児童生徒の参加については、その障がいの状態等による。

3 調査内容

- (1) 児童生徒に対する調査
 - ア 実技に関する調査
〔8項目〕握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン（中学校は持久走との選択）、50m走、立ち幅とび、ソフトボール投げ（小学校のみ）、ハンドボール投げ（中学校のみ）
 - イ 質問紙調査（運動習慣、生活習慣等）
- (2) 学校に対する質問紙調査
・子どもの体力の向上に係る学校の取組等

4 調査実施期間

- ・実技調査実施期間：令和6年4月から7月

5 調査実施校数（国立・公立、私立）

28,736校（小学校18,845校、中学校9,891校）

6 大分県児童生徒の状況

- (1) 調査校数・児童生徒数（公立）
 - ① 小学校（247校、男子4,533名、女子4,416名）
 - ② 中学校（124校、男子4,282名、女子4,151名）

7 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果（概要）について

（1）体力合計点による全国順位【資料1】

- ① 小学校5年男子 2位（九州1位）（R5：2位、九州1位）
- ② 小学校5年女子 2位（九州1位）（R5：6位、九州1位）
- ③ 中学校2年男子 1位（九州1位）（R5：1位、九州1位）
- ④ 中学校2年女子 10位（九州2位）（R5：4位、九州1位）

（2）体力合計点の状況【資料2】

- ① 全国平均との比較では、すべての学年が上回っている。

（全国とのポイント差 小男3.27、小女3.14、中男3.12、中女1.47）

- ② 中学校女子の平均は、全国は増加しているが、本県は減少している。

- ③ 昨年度の県平均との比較では、中学校男子は増加、小学校男女はほぼ横ばい、中学校女子は減少している。

（昨年度とのポイント差 小男▲0.02、小女▲0.01、中男0.44、中女▲0.85）

（3）各調査項目の結果【資料3】

① 小学校男子

全国平均との比較では、すべての項目で上回っている。

昨年度の県平均との比較では、上体起こし、シャトルラン、ソフトボール投げが向上し、握力、長座体前屈、反復横跳び、50m走、立ち幅跳びは低下している。

② 小学校女子

全国平均との比較では、すべての項目で上回っている。

昨年度の県平均との比較では、上体起こし、シャトルラン、50m走が向上し、握力、長座体前屈、反復横跳び、立ち幅跳び、ソフトボール投げは低下している。

③ 中学校男子

全国平均との比較は、すべての項目で上回っている。

昨年度の県平均との比較では、長座体前屈、シャトルラン、50m走、ハンドボール投げは向上し、握力、上体起こし、反復横跳び、立ち幅跳びは低下している。なお、50m走は過去最高値である。

④ 中学校女子

全国平均との比較は、上体起こしを除くすべての項目で上回っている。

昨年度の県平均との比較では、長座体前屈は向上し、握力、上体起こし、反復横跳び、シャトルラン、50m走、立ち幅跳び、ハンドボール投げは低下している。

(4) 体力総合評価（総合評価C以上の割合）【資料4】

- ① 全国平均との比較では、すべての学年が上回っている。

（全国とのポイント差 小男12.4、小女11.2、中男10.3、中女3.3）

- ② 中学校女子の平均は、全国はほぼ横ばいであるが、本県は減少している。

- ③ 昨年度の県平均との比較では、男子は小学校、中学校ともに増加し、女子は小学校、中学校ともに減少している。

（昨年度とのポイント差 小男0.3、小女▲0.7、中男3.6、中女▲1.7）

(5) 児童生徒質問紙による調査結果

- ①運動やスポーツへの愛好度「好き」「やや好き」の割合 【資料5】

- ・全国平均との比較では、すべての学年が、同等または上回っている。

（全国とのポイント差 小男0.0、小女0.5、中男3.0、中女3.8）

- ・昨年度の県平均との比較では、小学校男子を除くすべての学年が、増加している。

（昨年度とのポイント差 小男▲0.7、小女0.6、中男1.1、中女0.6）

- ・中学校男子は過去最高値である。

- ②1週間当たりの運動実施時間 【資料6上】

- ・全国平均との比較では、すべての学年が、上回っている。

（全国との差 小男59.1分、小女29.4分、中男92.3分、中女46.1分）

- ・昨年度の県平均との比較では、小学校男女は減少、中学校男女は増加している。

（昨年度との差 小男▲12.4分、小女▲5.9分、中男31.9分、中女16.4分）

- ③1週間の総運動時間が60分未満の児童生徒の割合 【資料6下】

- ・全国平均と比較すると、小学生女子を除くすべての学年が、低い。

（全国とのポイント差 小男0.8、小女▲0.2、中男3.4、中女4.3）

- ・昨年度の県平均との比較では、小学校男女は増加し、中学校男女は減少している。

（昨年度とのポイント差 小男▲0.9、小女▲1.8、中男2.3、中女1.8）

- ④体育、保健体育の授業の満足度（授業が「楽しい」「やや楽しい」の割合） 【資料7】

- ・全国平均との比較では、小学校女子を除くすべての学年が、上回っている。

（全国とのポイント差 小男0.3、小女▲0.1、中男4.2、中女5.6）

- ・昨年度の県平均との比較では、すべての学年が、上回っている。

(昨年度とのポイント差 小男0.2、小女0.1、中男1.6、中女0.6)

- ・小学校女子を除くすべての学年で、過去最高値である。

8 分析

(1) 本県の児童生徒の体力は、全国と比較すると依然高い水準にある。

- ・これまでの調査で、運動への愛好度が高いほど体力合計点が高く、運動実施時間が多い児童生徒のほうが体力合計点が高い傾向にあることが分かっている。本県は、運動への愛好度が高い。これは「体育、保健体育の授業が楽しい」と感じている児童生徒が多いことが要因と考えられる。また、運動実施時間も全国と比較すると、多い状況にあることから、本県の体力が高い水準にある要因になっていると考えている。

(2) 小、中学校女子は、運動する児童生徒と運動しない児童生徒との二極化の傾向にある。

- ・1週間あたりの運動実施時間が多い反面、一週間の総運動実施時間60分未満の児童生徒の割合は高い状況にあり、この割合の推移を見ると、増加傾向が顕著であることから考えられる。

9 総括

(1) 本県の体力が全国と比較して高い水準を維持し続け、コロナ禍以降、一部で回復傾向がみられるのは、小学校体育専科教員、小学校体育担任制専科教員、中学校体育推進教員を中心に、各学校が組織的に体力向上に取り組んでいる成果ととらえている。

(2) 本県の児童生徒の愛好度が高いことと、授業に対する満足度が高いことは、「わかる」「できる」「楽しい」授業に加え、運動の苦手な児童生徒に視点を当てた授業がなされているからであり、運動実施時間、ひいては生涯にわたる運動習慣の確立につながると思っている。一方、小学校男女の運動実施時間の低下が続いていることや、小中学校女子において二極化の傾向がみられることから、授業改善はもとより、学校・家庭・地域が連携して、多様なニーズを踏まえた運動機会の確保など、運動習慣の形成につながる取組を充実させていく。